

簡易コーパスを用いた語法指導

—— 英語ライティングでの語法指導の試み ——

浅見道明

1. 発表の概要

昨年度3年生の選択科目である英語ライティングでの試みを発表した。

ライティングの授業では生徒にほぼ毎時間あるテーマでB5用紙1枚程度のエッセイを書かせた。そのエッセイをアメリカ人のALTが添削し、私が添削する2重のチェックを実施した。ある時、生徒が不定詞の否定形をAn increasing number of women are choosing to marry later or not to marry at all.と書いてきたのを、ALTはto not marryと訂正していた。規範文法では不定詞の否定形はnot to doとnotをtoの前に置くことになっているが、最近はこういった表現が使われることもあるということを知り、興味があったのでコーパスを用いて調べてみた。また、別のエッセイで、生徒がI can't agree to the idea.と書いてきたものを、ALTがagree with the ideaと訂正してきた。我々はagree with+人、agree to+事柄と指導しているのに、全く逆の訂正であった。これについてもコーパスで調べてみた。

コーパス (corpus、複数形corpora) とはコンピュータで処理できる電子化されたテキストデータのこと、コンコーダンスプログラムを使ってキーワードを入力すると、そのコーパスに登録されたその語を含む文を抽出し、並べてくれる。現在では、保有数1億語といわれるThe British National Corpusと保有数3億語を越えたといわれる世界最大のThe Bank of Englishが有名である。

The Bank of Englishは利用するのは有料だが、サンプルとして無料で50例まで提供してくれる。そこで、上述のto not doについてThe Bank of Englishのサンプルで調べてみた。また、最近発売になったCOBUILD on CD-ROMは辞書の他にThe Bank of Englishからの約500万語の簡易コーパスが含まれており、これを利用してagree withとagree toの使い方を調べてみた。

不定詞の否定形to not doについて、コーパスのうちイギリスの文語からto notをキーにして調べてみると、17例が抽出された。しかし、不定詞の否定形でto not doに該当するものはThe key is to not make discussion of drugs a big deal but だけであった。また、アメリカの文語から調べてみると、17例が抽出され、8例がto not doに該当した。つまり、不定詞の否定形not to doがto not doとも使われるのはアメリカ英語ということが想像できた。

agree withで検索してみると、130例が現れた。内訳を見ると、agree withに続くものは人とそれ以

外の事柄で区別できるようであった。英文語では、人が続く例が22例、事柄が続く例が13例あった。事柄の内容を挙げておくと、what節2, this, that 2, anything, assessment, talking, the first of those sentences, this option, your comments, Dyson's view, the wayであった。米文語では、人が続く例が8例、事柄が続く例が7例あった。内容は、Sobel's analysis, this line, it, this reasoning, this approach, much of appraisal, the remarkであった。英口語では、人が続く例が15例、事柄が続く例が17例あった。内容は、what節3, that 9, it 2, taking, the unions, his point of view, your willであった。米口語では、人が続く例が26例、事柄が続く例が21例あった。内容は、what節2, that 9, some of the things, it, listing, various points, that thinking, his answer, that judgment, the characterization, his position, the premiseであった。

agree toで検索してみると、86例現れた。内訳を見ると、agree toに続くものは動詞の原形とそれ以外の事柄で区別できるようであった。英文語では、動詞が続く例が22例、事柄が続く例が16例あった。事柄の内容を挙げておくと、my terms 2, one of the rules, the apartheid system, a clause, any changes 2, an appointment, talks, a higher excess, the publication, every move, a whole series of lucrative payoffs, the rules, it, a pleaであった。米文語では、動詞が続く例が24例、事柄が続く例が11例あった。内容は、the terms 4, proportional fees, the sale, an inspection, a set monthly payment schedule, a compromise, the statement, the rulesであった。英口語では、動詞が続く例が1例、事柄が続く例はなかった。米口語では、動詞が続く例が6例、事柄が続く例が6例あった。内容は、something, who and how many, the deal, continuation, the mechanism, the termsであった。

つまり、agree with の後には人が続くことも多いが、事柄も続く、特に関係代名詞what節と指示代名詞thatが多い。また、アメリカ英語とイギリス英語の文語も口語も事柄が続くことがともに多い。ところが、agree toの後には動詞の原形が続くことが多いが、事柄も続く、特にtermsが多く見られた。また、イギリス英語の口語では事柄が続くことはほとんどないと考えられた。

2. 協 議

コーパスの信頼性について質問が出たが、これをもとにして辞書が作られているので信頼できるのではないかと回答した。その他、コーパスを鵜呑みにしていけないといった意見が出た。しかし、英語教師として普段の授業で使えそうな例文がコーパスから引き出せるメリットを伝えると納得していただけたように思う。